

3. 考察

※ 子供の学習状況や進路状況について

学習習慣や成績に対する生活状況による影響は小学5年生より中学2年生で大きくなっている。中学2年生では、等価世帯収入が低いほど学校以外での学習時間が少なく、成績や授業の理解度も低くなっている。

また、ひとり親世帯では小学5年生、中学2年生ともにその他の世帯よりも学習習慣や成績が芳しくなく、学習の遅れの一因となっていると考えられる。

進路状況に対する生活状況による影響は小学5年生、中学2年生ともに大きく、「中央値の1/2未満」では希望する学校や職業、成績状況に関係なく「早く働く必要があるから」、「家にお金がないと思うから」という理由で将来の進学先を考えている傾向にある。加えて、保護者との進学希望の差も見られ、経済的理由で希望する進路を断念せざるを得ない等の将来の進路への影響が懸念される。

※ 食事や就寝などの生活習慣について

食事に対する生活状況による影響は小学5年生、中学2年生ともに、朝食と夏休みや冬休みなどの期間の昼食について「中央値の1/2未満」で「中央値以上」や「中央値の1/2以上中央値未満」より「毎日食べる（週7日）」割合が低くなっている。夕食については、生活状況による影響はほとんどみられず、9割近くが毎日夕食を食べている。

また、就寝時間に対する生活状況による影響はほとんどみられない。

※ 人間関係について

人間関係に対する生活状況による影響は、小学5年生、中学2年生ともに困った時に相談できる相手として、生活状況に関わらず「親」や「学校の友達」の割合が高くなっているが、中学2年生では「中央値の1/2未満」で「中央値以上」や「中央値の1/2以上中央値未満」より「学校の先生」の割合が低くなっている。また、「中央値の1/2未満」においては、相談できる相手として、小学5年生では「きょうだい」や「学校外の友達」、中学2年生では「ネットで知り合った人」の割合が高い傾向にあり、犯罪等に巻き込まれる等の影響が懸念される。

※ 自己肯定感について

自己肯定感に対する生活状況による影響は、「情緒の問題」に関しては小学5年生ではひとり親世帯や等価世帯収入が低いほど問題性が高いと考えられる。「仲間関係の問題」に関しては中学2年生ではひとり親世帯や等価世帯収入が低いほど問題性が高いと考えられるが、小学5年生では生活状況に関わらず世帯子供の人数が少ないほど問題性が高いと考えられる。「向社会性」に関しては小学5年生では「中央値の1/2未満」やひとり親世帯、世帯子供の人数が多いほど社会性高い傾向にある。一方、中学2年生では「中央値の1/2未満」やひとり親世帯ほど社会性低くなっている。「仲間関係の問題」や「向社会性」に関しては小学5年生では生活状況よりも世帯子供の人数がより影響を与えていると推察される。

また、小学5年生、中学2年生ともに等価世帯収入が低いほど逆境経験にあてはまる割合が多く、生活満足度も低くなっていることから、生活状況が精神状態や生活満足度に影響し自己肯定感の低下につながっていると考えられる。

※ 支援の利用について

各支援について生活状況が「中央値の1/2未満」の世帯における利用は、小学5年生では「a) (自分や友人の家以外で) ごはんを無料か安く食べることができる場所 (子ども食堂など)」、中学2年生では「a) (自分や友人の家以外で) ごはんを無料か安く食べることができる場所 (子ども食堂など)」と「b) 勉強を無料でみてくれる場所」の利用が1割程度となっているが、小学5年生、中学2年生ともに「c) (家や学校以外で)何でも相談できる場所 (電話やネットの相談を含む。)」はほとんど利用がない。また、「a) (自分や友人の家以外で) ごはんを無料か安く食べることができる場所 (子ども食堂など)」と「b) 勉強を無料でみてくれる場所」は3割以上があれば利用したいと思っており、特に、中学2年生では「b) 勉強を無料でみてくれる場所」があれば利用したいと思っている割合が高くなっている。

利用者は「友だちが増えた」、「ほっとできる時間が増えた」、「気軽に話せる大人が増えた」、「勉強する時間が増えた」等、6割以上が何らかの変化があったと感じており、今後も子供の居場所等の支援の充実が重要であると考えられる。